

# 若江遺跡第70次・第75次発掘調査報告

—共同住宅建設に伴う—

目次	—————
1.はじめ	1
2.調査結果	2
造構と遺物	
3.まとめ	6

---

## 例言

本書は財団法人東大阪市文化財協会が藤原末一氏から委託を受けて実施した若江遺跡第70次・第75次発掘調査の報告である。

若江遺跡第70次・第75次調査は三輪若葉が担当した。第70次調査は、平成9年2月24日～2月28日の期間に労務提供という調査形態でおこない、川口仁啓、岸田勝行が補助員として従事した。現地の掘削は株式会社島田組がおこなった。第75次調査は、平成10年6月3日～6月19日の期間におこない、川鶴千尋が補助員として従事した。現地の掘削は安西工業株式会社がおこなった。本報告書の執筆・編集は三輪がおこなった。遺物の写真撮影はG F プロにより、一部は同協会別所秀高による。遺物の整理、版下作成には川鶴千尋、今井喬子、寺田文子の協力を得た。

## 若江遺跡第70次・第75次発掘調査報告

### 1.はじめに

若江遺跡は、東大阪市若江北町・若江本町・若江南町一帯に広がる弥生時代から江戸時代にかけての複合遺跡である（図1）。遺跡は、楠根川などによって形成された自然堤防上の微高地に位置している。

これまでの調査によって、若江幼稚園内は室町時代から織豊期にかけての城郭遺構である若江城本丸にあたることが推定され、また当該期の堀などが周辺で検出されている。

第70次・第75次調査は、藤原末一氏によって若江本町4丁目境内において、共同住宅建設が計画されることによるものである（図2）。東大阪市教育委員会文化財課によって試掘調査を実施したところ、第70次調査地点については、現在の地表面より45cmのところで近世の遺物包含層を確認した。また、第75次調査地点については、現在の地表面より30～50cmのところで近世・中世の遺物包含層を確認した。このため、市教育委員会文化財課と関係



図1 若江遺跡と周辺の遺跡分布

機関の協議の結果、いずれも工事によって遺跡が破壊される現地表面から60cmまで、財團法人東大阪市文化財協会が委託を受け発掘調査を実施することになった。第70次調査については、労務提供という調査体制で平成9年2月24日～2月28日までおこなった。面積は126m<sup>2</sup>である。第75次調査については、平成10年6月3日～6月19日までおこなった。面積は172m<sup>2</sup>である。

なお、当調査地は從来の調査結果から、若江城の外堀に関する何らかの知見を得られることが推測され<sup>1,2)</sup>、第70次調査の際、一部分について中世の造構面で確認させていただくことを東大阪市教育委員会文化財課から原因者にお願いした。しかし、この要望が設計事務所に伝わっていなかったために、原因者である藤原氏にはご迷惑をおかけする結果となつたことを深くお詫び申し上げる。

## 2. 調査結果

第70次・第75次調査地は道路を経て東西に隣接しているので、調査結果はあわせて述べる。

中世の遺構面は、黄灰色シルト・粘土層または黄褐色粗粒砂層で、玉串川によって形成された堆積層と考えられる。上面で11～12c、12～13c、15c以降の遺構を検出した。その上に70次調査地点は、整地層・包含層が無い、75次調査地点では、耕作土層が2～3枚認められ、耕作に伴う錫溝を検出した(図3)。さらに旧耕土・現代の盛土がその上を覆す。

### 遺構と遺物

#### S E 01 (図5～10)

調査区外へ広がるが、おそらく円形の掘りかたと思われる。掘りかたの直径は1.2m、深さは1mまで確認できた。井側は大きさの異なる曲物を2段重ねて使用していたと推測されるが、掘削してないため詳細は不明である。帶を縫じた痕も確認できる。上段の曲物の直径は37cmである。玉串川によって形成された黄灰色シルト層・粗粒砂層を掘り込んだ井戸底は調査をおこなった現在でも湧水があった。掘りかたの断面は青灰色粘土・暗オリーブ灰



図3 耕作に伴う錫溝検出中  
(75次地点)

色粘土の堆積が見られた。井側内は諸般の事情により掘削できなかつたが、掘りかた内から瓦器碗、瓦質捏鉢、常滑焼窯、鐵製品が出土した(図11)。

1・2の瓦器碗は和泉型で11c後半～12c初頭に属す。3は瓦質捏鉢で内面にヘラミガキをおこなう。口縁玉縁部は剥離している。図化していないが、常滑焼窯の体部にはタタキが若干確認できる。また、井側に曲物を使用する例は12c～13cに多く、今回検出したS E 01も同様に比定できると思われる。なお、S E 01は検出した後すぐに埋め戻した。

#### S K 201 (図11～14)

幅1.2mを測る不定形の土坑の中に灰が充満し、完形或いは完形に近い土師器小皿7点、土師器大皿1点が出土した。これらの土師器小皿はほとんど上向きの状態で出土した。土師器の所持時期は11c後半～12c前半である。このように土坑内に灰が充満し土師器皿、瓦器碗が出土する例は若江遺跡において散見される<sup>1,2)</sup>。

また、供膳具が大量に出土する遺構については多くの研究者が注目しており、なんらかの祭祀後に一括廻棄したもの<sup>3,4)</sup>、集落の施設を更地に埋め戻すことに伴う儀式<sup>5,6)</sup>などと述べられている。

今回検出したS K 201について考えてみると、溝のような大きな遺構ではなく、更地に埋め戻すためとは考えにくい。今後、灰を使うことを一つの指標にして史料にもあたりたい。



図4 調査風景 (70次地点)

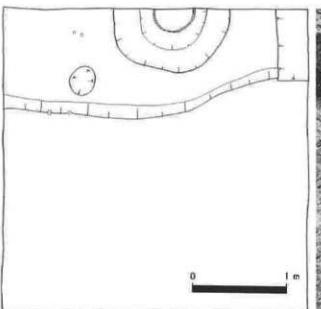


図5 SE01 平面図



図6 SE01 検出状況

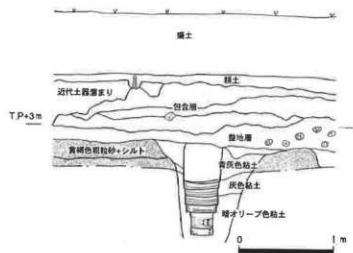


図7 断面図1(75次地点)



図8 断面写真



図9 SE01 井側検出状況

- 1.瓦器椀  
口径14.4器高4.8
- 2.瓦器椀底部  
底径6.2
- 3.瓦器挂鉢  
口径24.8器高8.1
- 4.鉄製品  
現存長5.1  
鉄斧と思われる



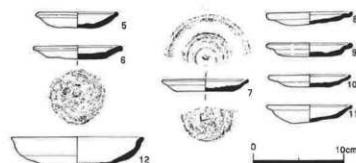
図10 SE01 掘り起きた内出土遺物



図11 SK201検出状況



図12 SK201 土師器皿出土状況



- 5.土師器小皿  
口径9.2器高1.7 淡灰褐色  
焼付着、底部ヘラ切り
- 6.土師器皿
- 7.土師器小皿  
口径9.6器高1.4 褐色  
輪轍使用、底部ヘラ切り、胎土はザザラしている
- 8.土師器小皿  
口径9.2器高1.3 淡灰褐色  
輪轍使用、底部ヘラ切り
- 9.土師器小皿  
口径9.0器高1.5 淡灰褐色
- 10.土師器小皿  
口径9.0器高1.3 淡褐色  
胎土精製
- 11.土師器小皿  
口径9.2器高1.9 淡灰褐色
- 12.土師器大皿  
口径14.6器高3.1 淡灰色

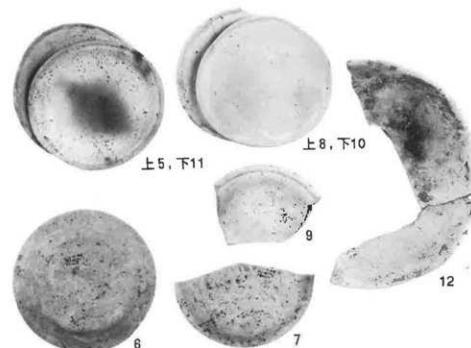


図14 SK201 出土土師器

#### SK 202

幅1.2mを測る不定形の土坑の中に灰が充满していた痕跡が見られた。このような状況はSK 201と共通している。

図15 SX201検出状況

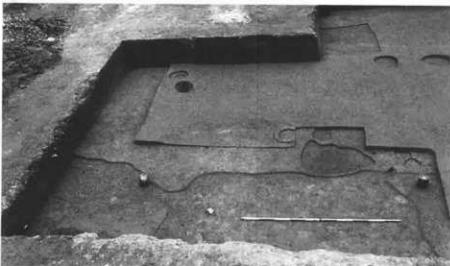
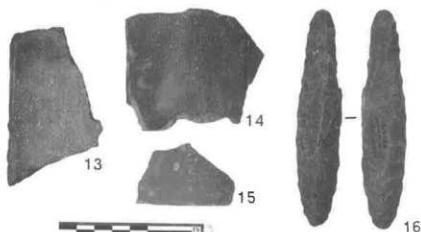


図16 SX201出土遺物



#### 13. 平瓦

凸面縄叩き→縁弧線、  
凹面縄弧線（コビキ A）

#### 14. 平瓦

凸面縄叩き、  
凹面縄弧線（コビキ A）→ナデ

#### 15. 丸瓦

凸面縄叩き→粗ナデ  
凹面布目→ナデ

#### 16. 尖頭器

サヌカイト 長さ 7.1cm

#### S X 201 (図16～18)

最大幅で南北5mを測る。埋土には中世のベースを形成している黄灰色シルト・粘土がブロック状に混入していた。上面で丸瓦、平瓦、常滑焼き指鉢、瓦質指鉢、土師器鉢等が出土した。いずれも遺構の時期を決定できるものはないが、15cを廻ることはないと考えられる。当初推定していた若江城の外堀の名残とも考えられるかもしれないが、掘削していないため判断できない。

上面で出土した瓦は丸瓦4点、平瓦4点である。凸面は縄叩き、凹面は布目や糸切りの縄弧線（コビキ A）が顕著である。12c後半～13cに廻すと考えられるが、その時期に存在した瓦葺き建物については検討を要する。

#### 3.まとめ

さまざまな条件の下での調査であったが中世の遺構を3時期確認できた。

中世の遺構面は隣接した調査地において70次地点がT.P+2.8m、75次地点がT.P+3.2mで検出し、40cm程度高低差があった。75次地点では中世以降、耕作地として近現代まで利用されたのに対し、70次地点では中世～近世にかけて中世ベースを削平し整地がおこなわれ、耕作以外の利用があったことが窺える。

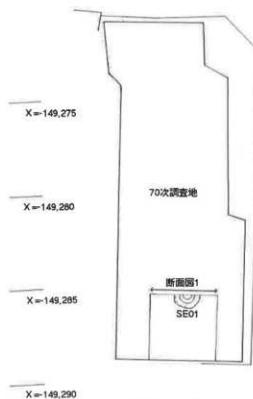
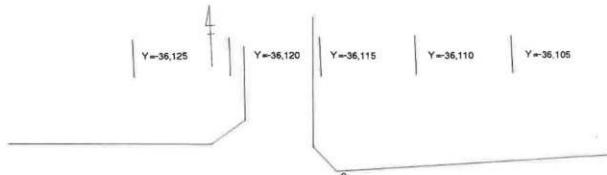


図17 70次地点・75次地点遺構図

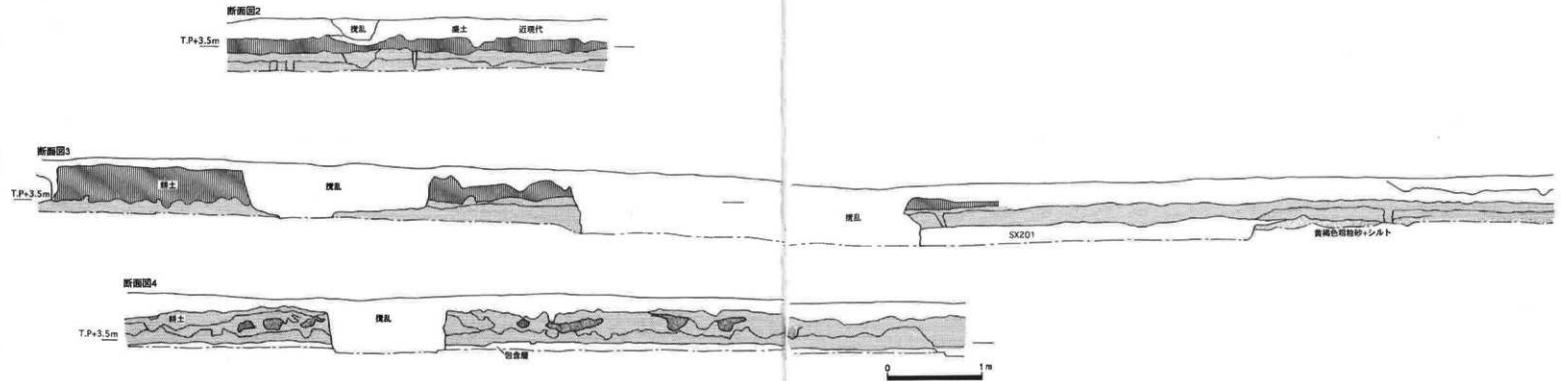


図18 土層断面図（75次地点）

注

- 注1 当調査地近辺にも小堀が示されている（福永1993）。
- 注2 若江遺跡第57次調査（曾我1996）、若江遺跡第65次調査（未刊行）にも類例がある。
- 注3 曾我恭子（1996）。
- 注4 鈴木康之（1996）。また、報文文中で「道筋内に充填された灰・灰とともに、一連の儀式に火が関与した」とも述べている。

参考文献

- 曾我恭子（1996）「第8章 若江遺跡第57次調査概要」「東大阪市下水道事業関係発掘調査概要報告－1994年度－」財団法人東大阪市文化財協会
- 金村浩一（1997）「第1章 若江遺跡第59次発掘調査概要」「東大阪市埋蔵文化財発掘調査概要－1995年度調査（2）」財団法人東大阪市文化財協会
- 井上伸一（1997）「第2章 若江遺跡第60次発掘調査概要」「東大阪市埋蔵文化財発掘調査概要－1995年度調査（2）」財団法人東大阪市文化財協会
- 若松博志（1987）「若江遺跡第25次発掘調査報告」財団法人東大阪市文化財協会
- 伊野近富（1995）「土師器皿」『概説 中世の土器・陶磁器』真陽社
- 鈴木康之（1995）「土師質土器」『概説 中世の土器・陶磁器』真陽社
- 市本芳三（1995）「瓦」『概説 中世の土器・陶磁器』真陽社
- 鈴木康之（1996）「第III章遺物 1.土器類」『草戸千軒町遺跡発掘調査報告V』
- 福永信雄（1993）『若江遺跡第38次発掘調査報告』財団法人東大阪市文化財協会

報告書抄録

- |        |   |
|--------|---|
| よみがな   | わかえ                                     |
| 書名     | 若江遺跡第70次・第75次発掘調査報告書                    |
| 調査名    |   |
| 巻次     |   |
| シリーズ名  | 三輪若葉                                    |
| シリーズ番号 |   |
| 編著者名   | 財団法人東大阪市文化財協会                           |
| 編集機関   | 577-0843 東大阪市荒川3丁目28-21                 |
| 所在地    |   |
| 発行年月日  | 2000年3月31日                              |
| 所収遺跡名  | 若江遺跡                                    |
| コード    | 市町村 27227                               |
| 北緯     | 34° 39' 15"                             |
| 東経     | 135° 36' 22"                            |
| 調査期間   | 1997年2月24日～28日、1998年6月3日～19日            |
| 調査面積   | 126 m <sup>2</sup> , 172 m <sup>2</sup> |
| 調査原因   | 共同住宅建設工事                                |
| 種別     |   |
| 時期     | 中世・近世・近代                                |
| 遺構     | 耕作跡、井戸、土坑など                             |
| 遺物     | 土師器、瓦器、陶器、鉄製品など                         |
| 特記事項   |   |

---

若江遺跡第70次・第75次発掘調査報告

—共同住宅建設に伴う—

発行 財団法人東大阪市文化財協会

印刷 喜光堂印刷株式会社

1999年6月

---